

【研究者】 山崎 由理

(助成決定時) 東北大学大学院 教育学研究科

【研究題目】

還流型移民家族における生活戦略と役割実践の諸相に関する文化人類学的研究  
- 日系ペルー人を事例として -

【研究の目的】

本研究は、ペルーと日本を還流する日系人家族に焦点を当て、現代の国際移民家族が企図する生活戦略と、各成員の役割実践の諸相を両国における双方向的な調査により実証的に明らかにすることを目的とする。本研究では還流型移民としての日系人家族が描く生活戦略と、各成員がそれに対してどのような意識を抱き、いかなる実践を行っているのかを、両国における彼らの生活世界に密着した調査から把握していく。ここで言う生活戦略とは、移民が自らの将来展望を実現するために主体的に選択する手段を指す。こうした移民家族の生活戦略と、それに対して各成員が実践する役割が、社会的状況の動態や移民として生活に制限を加えられる過程でどのように持続し変容していくのかを、移民の送出国と受け入れ国双方の状況において理解することを目指す。

【研究の内容・方法】

1990年代に加熱した日系ペルー人の日本への移住労働、いわゆる「デカセギ」現象は、一時帰国と再渡航を繰り返す還流型移住という一つの移住形態に特徴付けられる。彼らの多くがいずれは母国に帰るといふ漠然とした帰国意志を抱いており、こうした意図を反映して、家族成員の一部を母国に残したまま渡航する傾向が強い。しかし当初はペルーに残留したものの、その後デカセギ中の家族の生活状況に応じた呼び寄せや、帰国・再渡航の繰り返しなど、二国間を行き来する家族成員は少なくない。つまり、二国間を還流しているのは実際にデカセギをしている成員だけでなく、祖父母や子ども、あるいはそれに付き添う母親のように、労働とは異なる目的や意図を持って移動する存在も含まれることが見出される。

筆者は、デカセギにより二国間に分断された家族のライフコースの展開を日本・ペルー両国における状況から双方向的にとらえる調査を試みている。今回の報告はその一環として、デカセギ行為の始まりが日系人家族にどのようなインパクトをもたらしたのか、特に非労働力家族成員の動向に着目し、日系人子弟のうち10代から20代前半の年齢層に焦点を当て、自身の日本滞在大および帰国後の体験、あるいは家族成員の日本への渡航がもたらした家族関係の変化について、ライフヒストリーによる考察を試みた。インタビューは、主にリマ市と一部プカルパ市にて計53人、さらに滋賀県草津市と大阪府豊

中市において計 10 家族に対して行った。特にペルーでの調査では、一世の移住から現在にいたるまでの家族史と生業の変化についても、同時に家族成員からの聞き取りを行い、日本へのデカセギをその家族史全体のなかで位置づけるよう努めた。こうしたことにより、デカセギを独立した現象としてでなく、各家族の生活史や生活戦略といった背景から、それがどのようにして生まれたものなのか、また各家族成員のライフコースにどのようなインパクトを与えたのかの理解を目指した。

#### 【結論・考察】

家族成員の移動には、そのつど両国における家族構成の再編とそれにとまなう成員の役割変化が付随する。事例からは、両親の渡航により残された子どもが祖父母や親戚の家族に組み込まれる場合、構成された家族内で各成員が新たな役割を期待されることが確認できた。また二国間を行き来する成員は、二国間にまたがる家族をつなぎとめる役割を担っており、その背景には還流型移民の帰国意志が反映した戦略が見て取れる。例えば子どもの移動を決定づける判断材料として、日本滞在中に形成された親の教育観や文化的イメージとともに、親自身が企図する生活設計が挙げられる。つまり将来的に母国での生活の安定を目指す親は、呼び寄せた子どもでも最終的な高等教育はペルーで受けさせるため、再び帰国させるケースが少なくない。一方で、子ども自身は、自らの日本滞在経験に親とは異なる意味づけをしており、こうした親子間での解釈や思惑のずれが、のちの子ども自身の主体的な国家間移動を生み出す要因となっている。